



「忘却の河」 試解：過去の呪縛・言葉の呪縛

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-01-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西原, 千博 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007159

『忘却の河』 試解

—過去の呪縛・言葉の呪縛—

西 原 千 博

忘却は、おそらくは、逆行できない時の流れが、取り消せないものを打ち負かさないうまでもすくなくとも緩和するようにとわれわれに提供するもつとも自然な、もつとも常時手元にある武器だ。

(V・ジャンケレヴィッチ「還らぬ時と郷愁」⁽¹⁾より)

I

福永武彦の『忘却の河』は全体で七章に分かれており、それぞれが短編小説として個別に発表された後に、長編小説として出版されたものである。これらの章は、その中心になる作中人物がそれぞれ変わっていくという形式をとっている。その中で主人公と呼べるのは、第一章「忘却の河」(「文藝」昭和三十八年三月)と最終の第七章「賽の河原」(「文藝」昭和三十八年二月)の中心人物である「藤代」である。本稿ではこの「藤代」に注目して分析していきたい。ただ、各章はそれぞれが視点を交えることにより、お互いを鏡に映すような構造になっており、

特に「藤代」の姿を相対化させる役割を果たしている。単に一章と七章だけを取り上げて論ずることは出来ないだろう。「藤代」を中心として、他の章についても随時触れていきたい。

この作品が昭和三十九年五月に新潮社から刊行された時の朝日新聞での紹介記事の見出しは、「過去を背負う男」というものであった。まさにこの見出しのように、主人公「藤代」は、過去の出来事に縛られて生きていくような人物だと言える。けれども、では過去とは何だろうか。例えば、「藤代」の幼年期について、一つは「困ったねえ、いっそ河に流して」という母の言葉、あるいは「えなが流れて来る河」という子供の言葉に代表される暗い過去と、正反対の「夏は子供たちが裸になって水遊びをするような、楽しい思い出をいっぱい詰めて込んでいる」という「最も明るい記憶」がある。同じ河にまつわるものでありながらまるで逆なのである。また、一つここで注目しておきたいのは、前者はあくまでも言葉としての過去に過ぎないということである。「藤代」は「えな」の流れているのを見た

わけではない。それに対して後者は彼自身の肉体をともなった過去ということになる。

そこで、本稿ではこれらのことを踏まえた上で、過去の呪縛という点に注目しながらこの作品を分析していきたい。なお、これまで指摘されてきた罪や愛、並びに家族というモチーフについても併せて考えていきたい。

II

この作品は「私がこれを書くのは」という書き出しで始められている。この作品の中でも第一章と第七章は「藤代」によって書かれたものということになっている。では何故「藤代」は書くのか。それは何かを発見したからだと言うが、その発見されたものは、「過去」なのか、「運命」なのか、それとも「物語」なのか、本人にも解らず、むしろ発見していないのではないかとさえ書いている。何か解らないがとりあえず、ある部屋で原稿用紙に書いているということである。この書くということ並びに発見については後に触れることにして、この「藤代」の書いている過去について見ていこう。

「藤代」にとって、過去は彼の意志とは関わりなく唐突に彼の目の前に現れるものであった。

すると不意に記憶というほどの明らかな形を持つのではない過去の時間の流れが、灰色に濁ったまま、私の頭脳の中に逆流して来る。それは頭脳を充し、その中にきれぎれに未練がましい情景を浮かべせることもあるが、私は大抵は、意志

的にそれを追い払おうとする。この意志的ということが大事なのだ。そういう訓練を続ければ、人は厭なことを忘れることが出来る。ただ時々、私の意志を無視して、過去の私が第三者のように私の前に立ちはだかつて来ることがあって、それが私には恐ろしいのだ。

過去と記憶という言葉は区別して使う必要があるだろう。過去は藤代の意志に係わらず彼の目の前に現れる。そして、そのためにその中にいる自分は「第三者」の如くであり、「藤代」はそれを「彼」と自分とは区別して呼ぶ。

いったい過去に何があったのか。しかもそれは忘れようとするような厭な過去である。読者は藤代の過去に興味を持たざるを得ない。それは読者に疑問・謎として提示される。作品は現在の「藤代」（「私」と過去の「彼」とが交錯して語られていく。そして過去は現在に近いものから遠くのものへと語られていき、その過程を通して謎解きが行われるのである（謎のコード）。そのようにして、作者は読者を作品中に引き込もうとするのである。いや、厳密には現在も、時間の幅があり、作品の最初の場面よりも数日前の出来事が書かれていく。ただし、それらは謂ば記憶の領域に入るものだろう。

そのような過去が最初に登場するのは、ある台風の次の日、仰ぎ見たビルの窓が「無数の、涙に濡れた眼」に見えた時であった。

その時、この偶然が私にもたらしたものは何と名づけたらよかつたらうか。眩暈だろうか、放心だろうか、感動だろう

か。私はこんなに数多くの眼を一度に見たことはない。それらの一つ一つが生きて、泣いて、訴えて、私の心の奥底を覗いき込んで、何かを私に語っていたのだ。お前は忘れていいのか、忘れたままで生きていることが出来るのか、と。いや、そうではない。もっと別のことを言っていたのだ。私たちはお前を見ているよ、と。そうただそれだけのことを語っていた。無心に語っていた。そして私の方が見られていることを強く意識したあまり、私の経て来た時間が私にとって何であったかを反省せざるを得なかったのだ。その眼は彼を見ていた。その二つの落ち窪んだ眼窩は彼を見ていた。

この多くの眼とは何か。言うまでもなく、過去の人々の目であろう。その眼が「見ているよ」と言うのに対して、「忘れていいのか」と受け止めてしまうのは、先の忘れようとしていることに結びついている。「藤代」は過去から逃れようとしているかのようなのである。ここでも彼の過去、いや現在に通じる時間が否定的に語られている。そして、何よりもここで注目すべきは、最後の「彼」である。これこそ先に「第三者」とあった、過去の「藤代」のことに他ならない。では、その「彼」を見ていた、「その眼」とはいったい誰の目だったのだろうか。

そこにあるのは確かにもう生命のない一つの機械、壊れてしまった一つの神の玩具にすぎなかった。しかし彼にとつては、それはやはり、彼（戦友）だった。（中略）故国に可愛い妻が待っているとしょっちゅう惚気を言っている奴、己はどうしても国へ還るぞ、死んでたまるかと言いついて彼を

励ましてくれる奴、（中略）もしも共に生きることが愛であるならば彼が確かに愛を感じている奴。

その男は両目を見開いたまま死んでいた。天を向いた二つの眼球に、雨が落ち、雨がたまり、落ち窪んだ眼窩は涙をたたえ、その涙は天の蒼さを映していた。その眼が彼を見ていた。茫然と傍らに佇立し、言葉もなく、意志もなく見下ろしている彼を、その落ち窪んだ眼窩が見詰めていた。

見ていた眼は戦争で死んだ戦友の眼であった。作品の現在は昭和三十年代と推定されるので、二十年あまり以前の出来事ということになる。

ここで戦友との関係を「愛」と呼んでいるが、この「愛」こそ、藤代を苦しめるものである。愛した人たちは彼の元から去っていく、いや死んでいくというべきだろう。

彼が考えていたのはこういうことだ。己が死んだ方がよかった。己は死ぬべきだった。己はもう死んでいたのだから、その時に。その時とは、いつのことか、その過去の時間の記憶が素早く回復されたような気もするが、しかし彼は常に意識して忘れようと努めながら、しかも無意識に、しばしば夢でもなく現でもないような状態の中でそのことばかり考えていたのだから、その時も今息を引取ったばかりの戦友の屍を眼の前に置いて、彼が、己は既に死んでいたのだからここでこいつの代わりに己が死ねば良かった、と考えたかどうかは怪しい。寧ろ、己は今の瞬間まだ生きているし、己はそういうふうに罪深くあるべく出来ているのだ、と考えていたよう

な気がするのだ。彼はいつも自分を罪深く感じていた。神に對して。いや彼が神を信じていたかどうかは疑わしい。彼はただぼんやりと、すべての人間に對して、自分に對して、生きてゐるのは罪ではないか、取り返しのつかぬ罪ではないかと感じるように出来ていた。

この文において、「その時に」というもう一つの過去が示される。この戦友との過去が、彼の厭な、忘れようとする過去そのものではなく、既にその前にもっと決定的な過去があったことが示されているのである。しかもその過去により、彼が「既に死んでいた」と考えるような過去である。ここでも過去に何があつたのか、という読者の疑問は増していくのである。

さらに、藤代は戦友の死に罪を感じている。ただ、その死に彼が直接責任があつたというのではない。彼が生きていることによつて彼の周りの人に、「愛」する人に死をもたらすのではないかという罪の意識である。そのように人に死をもたらすような自分の存在を罪深いと思つてゐるのであり、「生きてゐるのは罪ではないか」と考えるのである。これは一見キリスト教でいう原罪ということではないかと考えられる。けれども、あたかも読者のそのような読みを否定するかのようには、「神を信じていたか疑わしい」と書かれ、さらにこの後「神に赦されることのない罪」だとも言つてゐるのである。これは、「己はもう死んでいたのだから」という彼のこの戦争以前の過去が係わつてゐることが考えられる。「藤代」はこの時点では結婚してゐたのであり、彼もまた本来は「可愛い妻」が故国に待つて

ゐるに違ひないのである。けれども、「藤代」は死んでゐると言うのである。過去に何があつたのか。また、「既に死んでゐる」と言うことは、現在の自分の存在を否定することにもなる。否定すべき過去、否定されるべき現在、そしてその原因としての罪。作品はこの戦友の死の描写の後、現在に戻ってくるが、我々はさらにその過去について見ていこう。

III

天窓から漏れて来る薄ぼんやりした光線の中で、彼は彼女のひたむきな表情を美しいと思つてゐた。(中略) わたしあなたが好きよ、本当に好きよ、このまま死んでしまいたい。僕が死ななかつたのは君のお蔭だ、と彼は言い、やさしくその肩を抱き寄せた。(中略) わたしあなたが行つてしまつたらきつと死ぬわ、と彼女は言つた。きつと死ぬわ。

結核の療養所に入院した「藤代」はそこで一人の看護婦と出会う。学生時代に思想活動に従事し、思想の転向を避けるために肉体に死をもたらすべく結核となり、死にかけて「藤代」はこの看護婦に出会うことで生き返ることになる。看護婦の愛によつて生きようとするのである。けれども、結婚ということになると、看護婦は自分の身分ということにこだわり続けている。

わたしは結婚なんか出来なくてもいいの、そんなこと望んでゐるわけじゃないの、と小さな声で言つた。わたしはあなたと別れて、あなたが行つてしまふのが怖いだけなのよ。だ

から僕はきつと迎えに来るよ。(中略)でもきつと無理よ。わたしは田舎者だし、こんな療養所の看護婦だし、あなたは大学まで行っている偉い人なんだもの。(中略)わたしもあなたが好き。あなたがいなくなったらわたしきつと死ぬわ。東京の大学生と東北の貧窮の田舎から何とか出てきて看護婦となった女性。戦前という時代を考えれば、ここで言う身分違いということもあながち的外れとは言えない。無論、ここには都会と田舎、東北と東京という対照や、大学という文化的コード、あるいは貧窮という社会的な問題が関わっていると考えられる。⁽³⁾しかし、本稿では作品中の過去という点に絞って考察していきたい。

この療養所に一年半いた後、「藤代」は回復しここを去ることになる。当然彼は看護婦と結婚するべく両親に話そうとするが、なかなか話を切り出せない。その一つの理由が「藤代」がもともと養子であったということにあった。そして、実はこのこと自体もう一つの過去ということになる。それはさらに後で述べることとして、結果として逆に彼は両親に縁談を勧められることになる。しかも、「親父はこの縁談は断るわけにはいかない」と言い、「看護婦なんかをうちの嫁に貰うことは出来ない」と言う。看護婦の見方が世間の見方ということであった。すべては遅すぎたし、「藤代」は世間知らずのお坊ちゃんだったということになる。結局、「愛情は少しも変わらなかつた」と言いながら、縁談を承知してしまう。それを「藤代」は「結局、己という男には人間としての一番大事なものを、生きることへの

誠意が足りなかつたのだ。」としているのである。謂ば恋愛以前に人間として、生きていく上で欠けていたものがあつたというのである。「生きることへの誠意」とは何か。そして、何故それが足りなかつたのか。無論これもまた、過去に関わっているであろうことが想像されるのである。

そして、結婚式の一週間前になって、療養所に看護婦を訪ねるのだが、彼女は田舎に帰ってしまった。

彼女は帰つた、まさにそのさみしい村へ。彼が療養所を去り、東京へ戻り、父親から縁談を持ちた掛けられたその同じ頃、妊娠したことを知って勤めを止め、故郷の村へ帰つた。彼に相談することもなく。なぜだろう、なぜ相談しようとしなかつたのだろうか。手紙を書くことも出来た。どんなに字が下手でも事実を伝えることだけは出来た。(中略)しかし彼女はそうしなかつたし、黙つてふるさとへ帰り、怖い顔をした人々の間で暫く暮らし、そして、やはり彼に相談することなく死んだ。お腹の子供と一緒に。

看護婦は妊娠し、自殺していた。そして、「藤代」は、彼女を殺すことで私もまた死んだのだ、と私は考えた。そして私はそれから三十年も生きて来た。今も生きています。戦争に行つても死ななかつた。戦後の険しい生活にも生き残つた。罪を感じ生きること何等の意味をも見出してはいないのに、私はこうして生きています。

と、考えている。戦友の死に対して「己はもう死んでいた」とはこのことを指していたのである。

ところで、先の戦友の死といい、この看護婦の死といい、客観的に見て、果たして「藤代」に罪はあるのだろうか。

この点については、これまでも論及されてきたところである。例えば、倉西聡氏は「福永武彦『忘却の河』論」⁽⁴⁾の中で、次のように述べている。

藤代の意識ではこのように、自分が間引きそこないの子であることにも看護婦を死に追いやつたことにも、同じレヴェルでの罪を抱いているのだと言えるが、しかしこの二つは本来別である筈のものではないか。看護婦を死に追いやつたことは藤代自らが行為として犯した罪だったのであり、それゆえに絶対的な罪と言えるものではないか。

倉西氏は看護婦を死に追いやつたことに対して「絶対的な罪」としている。また、宮島公夫氏も「『忘却の河』論——家庭問題を視座として」⁽⁵⁾の中で同様の指摘をしている。

自分の行為が結果として一人の人間と胎内の一つの生命を殺したという自責の念は、たとえ自らが手を下した殺人でなくとも過去として払拭できるものではない。これは明らかに死んだ看護婦に対して藤代が負うべき責任であった。それ故に藤代はその罪を負うことを選択し、他者と関わる罪であるが故に転向の時とは異なり自らの魂の死を選択するのである。

確かに、「藤代」は看護婦を裏切つた。けれども、それが自殺の直接原因ではない。看護婦は「藤代」が裏切つたことすら知らなかったはずだからである。無論、なかなか結婚の返事が

こなかったこと自体が、看護婦を苦しめたであろうことは考えられる。しかし、仮に結婚が認められていたとしても、彼女は死んでいたと考えられるのである。「死に追いやつた」とは言い切れない。むしろ何故看護婦は妊娠したことを伝えてこなかったのか、という憾みもある。裏切りは必ずしも彼の罪とは言えないのであり、客観的に見て責任を問えるのだろうか。

むしろ注目したいのは、「その同じ頃」という言葉である。「縁談を持ち掛けられた」時と、彼女が帰つた時とがちょうど同じ時であつたという点である。あたかも「藤代」の中の負のベクトルが、彼女をも負の方向、死の方向に動かしかけたようなのである。さらに結婚を承諾したことに感応したかのように彼女は自殺したのである。「藤代」はこの知ることの出来なかつたはずの二つの感応に、彼の罪を見出すのではないだろうか。客観的には罪がないこと、そのことが、逆に単に彼が罪を犯したということにとどまらず、彼の存在そのものを罪として認識させて行くのではないだろうか。

ただ、これを看護婦の側から見ると、まさに彼女の予想していた通りのストーリーだったのかもしれないのだ。彼女は既に自分と「藤代」とを身分違いとして捉えていたし、「藤代」の養子としての弱点も充分把握していた。解つていなかったのは「藤代」だけだったのだ。そして、彼女の何度か繰り返した言葉、「わたしあなたが行ってしまったらきつと死ぬわ」という言葉通りになつたのである。看護婦は、最初からこのような未来を見取っていたのかもしれない。だからこそ、妊娠についても知

らせなかつたとも考えられる。しかし、これは結果的にであれ、彼女は自らの発した言葉に呪縛されていたとさえ見ることができるとはでないか。また、人が自分の生命を掛けて話したことが、結局聞く方には単なる比喩や誇張としてか捉えられないこともある。彼女はあたかも自分の未来を占うが如く、「あなたが行ってしまったらきつと死ぬわ」と言っていたかもしれないが、「藤代」にはその言葉のもつ本当の意味が解っていないからである。解っていればもっと早く看護婦のことを両親に話していたらろう。誰かにとつて重い言葉が相手にはそのまま伝わらず、また、逆に本人には軽い言葉であったものが、相手には決定的な言葉となる。ここには言葉の持つ怖さが暗示されているのである。

また、看護婦との楽しかった思い出、それは作品中に幾度か書かれているが、それらはすべてこの「わたしあなたが行ってしまったらきつと死ぬわ。」という一言に収束されていってしまう。この言葉によつて楽しい思い出は暗い過去へと変わっていく。さらにこれは後に「妊娠したことを恥じて淵から身を投げた」というより暗い言葉、罪に結びつく言葉に代表されていく。過去は肉体をともなつた楽しい思い出があつたはずなのに、すべてが忌まわしい言葉に置き換えられていくのである。言うまでもなくそれはすべて「藤代」の罪の意識の反映なのである。また、先にも触れたが、「わたしもまた死んだ」とはどのような意味なのであろうか。それは単に愛情を失つたということだけではなく、その時から「藤代」の時間が止まったまゝになつ

ている、という見方もできるのではないか。高橋源一郎氏は、ブルーストの『失われた時を求めて』の有名なあのプチット・マドレーヌを食べる場面について（この作品がこの『忘却の河』の過去の描き方の原型とも言える）、次のように述べている。

その瞬間まで『失われた時を求めて』の作者はなににもかも忘れていた。物理的時間だけが流れる虚しい空間にたつた一人で、震えながら、宙ずりにされていた。それが「死」に閉じこめられること、「時間」から切り離されることの中身だつた。

けれども、作者は、ほんの僅かなきっかけ、紅茶に浸したプチット・マドレーヌというささやかなものに触れた瞬間、時間が流れ出すのを感じる。たつた一つの小さな穴から、鋭い錐に似た朝の光が差し込んでくるような、力強いなにか、優しく慰撫してくれるなにかが作者は話者の心をいっぱい満たしはじめる。

それが「時間」が流れること、閉じこめられていた「死」から解放されることの中身なのだ。

時間から切り離されていることは、死んでいることなのだ。単に愛情の喪失ということだけではなく、「藤代」が過去を忘れようとする、過去を否定しようとする、そのことによつて時間の流れから切り離され、「死」に閉じこめられているのではないか。

さらにもう一つ別の見方を付け加えるなら、「死んでいる」というのは、自己を見失つていくという意味でもあるのではない

いだろうか。過去を否定し忘れようとすることにより、現在のみが、「物理的時間」、日常的な時間のみが残るのである。それは、自己という過去から現在に繋がる一貫した存在を失わせることである。「藤代」は、「私」(現在)と「彼」(過去)とに分離していた。それは自己という存在をあやふやなものとし、生きることの意味を喪失させてしまうのではないか。「藤代」は、日常的な時間の中に自己を埋没させ、自らを見失っていたのではないか。唯一の例外は、日常の時間から切り離されていた、彼が書いていたあの部屋だけであったのだ。そこで彼は自己と向き合うことが出来たのである。

ただ、ブルーストにおいては、過去の記憶は時間を回復する役割を果たしたが、この作品では必ずしも時間は回復されていない。というよりも、まだ、この時点では過去は否定すべきものでしかないからである。どうやって過去を見出すのか、現在を取り戻すのか、あるいは自己を見つけるか、これがこの作品の主題ということになるが、それは主に第七章の方で書かれることになる。

IV

本人は聞いていないと思って、思わずもらした言葉、それがたまたま聞いてしまった相手の人生全体を支配してしまう。これは「藤代」についてこそ言えることであった。

或る夜、私は夜中に目を覚まし、隣の部屋から漏れて来る話し声にふと気を取られた。(中略)私の名前、それにあの

時も、という何やら昔の話。困ったねえ、という母の嘆息。父の声の方は低くて聴き取れなかった。そして不意に、やや甲高い母の声で、いっそ河に流して、というのが聞こえた。その河という一言で私はぞっとする程怖くなった。

最初にも触れた「藤代」の過去である。その河というのが「えなが流れて来る」という河なのである。そして、「思えば生きていることが罪であるような感じは、もうその頃から、私の心の奥深いところで疼いていたのだ。」と考えるのである。

この幼児の頃が、彼の過去の最も昔ということになる。母に河に流そうかと言われ、さらに「あの時も」と、もしかすると生まれたばかりの時にも、同じように母に殺されようとしたかもしれないのである。母に喜ばれずに生まれてきたこと、その存在を母に認めてもらえず否定されたこと。これが「藤代」のトラウマとなり、彼の「生きることへの誠意」を奪っていたのではないかと考えられるのである。しかも、それを母に対する恨みとしてではなく、自らの罪として認識してしまうのである。

(ただし、「思えば」とあるように、ここには現在の「藤代」の意識の投影を読み取ることもできる。ここで罪の意識を見出すのは、自分が最愛の看護婦を裏切ったという行為に対しての「藤代」自身のとまどい、後悔が反映されているためであるというのではないだろうか。) また、この母に認められなかったことは、養子に出されたことによって、はっきりと裏付けされることになったと考えられる。(むしろ、養子に出されたということが、聞き流せたはずの母の言葉を「藤代」の中に植え付

ける働きをしたとも考えられるのである。) 果たして母親はどのような意味をその言葉に込めていたかは解らないが、「藤代」の人生はこの母親の言葉の呪縛から逃れられない人生だったのである。しかも看護婦がお腹の子供とともに自殺したことは、この母の言葉を具現化したようなものでもあったのだ。

また、この言葉の持つ力ということについては、既にこの作品の冒頭で示されていた。先にも触れたように「私がこれを書くのは」と、「藤代」が原稿用紙に書くところから始まっているが、このことはすでに言葉こそがこのテキストの中で意味を持つものであることが宣言されていたのである。言葉がこの作品を、物語世界を支配し、呪縛しているのである。「藤代」が書くのは、彼が言葉に呪縛されていることからくる、無意識の行為なのである。だから「藤代」自身は何故自分が書いているのか解らないのである。

V

次に「藤代」の家族たちにとって過去とはどのようなものであったかを簡単に見ていきたい。

「藤代」の妻については第一章の中でも触れられ、第四章「夢の通り路」(小説中央公論 昭和三十八年十二月)は、その妻を中心とした章になっている。その妻は「病気の原因も治療法も」医者に解らない病気で、十年も寝たきりであつた。そのためか、妻は「藤代」とは正反対に過去の中に生き続けるような女であつた。その過去とは最初の子供の死である。第一章に

は次のように書かれていた。

わたしはもう死んだ方がましだ、あなたはそうして蛇の生殺しみたいにわたしを見ていてさぞ満足なんでしょうね。あなたはうわべは親切そうで、善人ぶって、いつでも人には家内が可哀そうでなどと言いながら、本心ではわたしを早く死ねばいいと思っているんでしょう。あなたは心の冷たい人だ。涙一滴こぼさない人だ。あの子が死んだ時だつてあなたは涙一滴こぼさなかつた。(中略)何が昔なんです。わたしは今だつてあの子のことを思い出しますよ。わたしの枕のそばで眠っていたあの子、可愛い子、こうして毎日寝ているとあの子のことを考えないことはありませんよ。可哀そうなわたしの坊や。

「藤代」は過去を忘れようとし、それは「取り返すことは出来ない」と冷静にその子供の死を捉えている。それに対して妻は今でもその子のことばかりを考えている。一つには妻は寝たきりで、未来という時間がなく、過去という時間しかないためだとも考えられる。この点について、作者福永武彦は菅野昭正との対談「小説の発想と定着」の中で、次のように語っている。

実際のほくという人間は、戦後サナトリウムに長い間いましたから、サナトリウムにいる人間にとって、なんといいですか、「意識」というものは——一般的に「過去」の意識と、それから「現在」の反射的な意識ですね、それから「未来」の意識——想像・空想ですね、その三つから成るものですね、そのうち過去の意識というものが、つまり「記憶」とい

うものが、ものすごく比重が大きいわけですね。現在の意識というものはすこぶる貧困ですから、ほとんどないにひとしいみたい……反射的なものしかないわけです。

で、患者はなるべく、「未来」の意識をもとうとするけれど、未来の意識をもっているうちにすぐ、過去へもどるわけですね。そのもどり方というのは、ああいう、絶対安静で寝ていると、もう極端に支配的なわけです。(中略)ですから、そういうことよりも、未来の意識をふくらませる、つまり、楽天的にものを考えて過去へもどらないことが、はるかに大事なことになるでしょう。ですから、ぼくはもう、徹底的に、自分を楽天主義者にするべく精神を訓練したわけです。

福永は、自分の入院中は過去に意識が行きやすいために、未来に意識を向かわせるべく楽天的になろうと訓練したという。この福永の言葉に対して、菅野は「小説の人物とはまるで逆ですね。」と述べている。この菅野の言葉通りこの寝たきりの妻は、楽天的とはほど遠く過去をのみ見ている。無論すべての患者が福永のように楽天的になろうと訓練していたわけではなく、中にはこの妻のように過去の意識だけの患者がいたかもしれない。少なくとも単純に病気であるから、寝たきりで治る見込みがないから、過去ばかり見ているのだとは言えない。

では、第四章では、具体的にどのようなように描かれているのか。妻は「わたしにとって時間というものはないのだし、この影のなかにいるような気持ちは死んでしまった人たちがあの世で感じている気持ちにどれほど違っていないだろう。」と

あたかも死んでいるようであり、その点では「藤代」と似ていると言えなくはない。そして、彼女が最初の子供の死にこだわるのは、彼女もまた過去に縛られていたからだと言えるだろう。その過去とは、自分の弟「清ちゃん」の幼くしての死である。

清ちゃんのいなくなったことは、わたしの気持ちはうえに何がしかの傷をつけていたにちがいがなかった。わたしが結婚したあとあんなにも男の子をほしがり、そして生まれた子が坊やだと知ってあんなにもあんなにもよろこんだのは、その時の傷がまだ癒されずに残っていたためではなかったろうか。それが坊やの死とともに、今度はもう取りかえしのつかない傷となってわたしの心をむしばみ、一切を影のなかにつみこんでしまったような気がする。

この妻においては幼かった弟の死が、現在を呪縛する過去としてあった。この二人の結婚は既に見たように、「藤代」においてはうまく行く筈のものではなかったし、この最初の子供の死によって二人の仲は決定的に冷め切ってしまう。

けれども、妻が過去にのみ閉じこもるのは、このような暗い過去によるだけではない。むしろ一つの明るい過去がその理由としてある。それは、「呉」という学徒出陣で死んでしまった大学生との恋愛である。

呉さん、あなたは今も遠い世界からわたしがこうしてあなたのことを思いつづけ、寝たきりの病人と自分の残された日々をかぞえながら一日また一日と朽ちはてて行くのを眺めていらっしやるのだろうか。(中略)わたしは昔の日のことを

思い、夢のなかであなたに、昔の若いあなたとともに、しばらくの時をともしすばばかり。(中略)しかしわたしはまだ生きていて、あなたのことを思い出している。生きているから思い出すのか、思い出すから生きているのか。わすられてはうちなげかるるゆふべかなわれのみ知りて過ぐる月日を。

思い出すことが生きることなのであり、妻の意識が過去に向かうのは「藤代」が考えていたものとは違っている。「藤代」にとって過去は忘れようとするような厭なものばかりであったが、妻には唯一明るい過去、思い出があったのである。それが妻を過去に向かわせていた。

わたしが呉さんを愛したのは、その頃のわたしのむなししい気持ちと式子内親王の御歌によって掻きたてられたわたしのなかのあこがれとが、ひたすらに愛をもとめていた結果なのだろう。

そして、彼女は「呉」から「おくさん、僕はあなたが好きだ。」と告白されるようになる。けれども、結局「呉」には「赤紙」がきて、「マリアナ方面」で戦死してしまう。ほんの夏から次の年の春の初めまでの短い恋であった。けれども既に述べたように、この恋が寝たきりの病人である妻の唯一の支えとなっていた。それは最後の第七章に書かれている、妻の死ぬ数日前に交わした言葉に現れている。

わたしは自分のふるさとが海にあるような気がします。と妻は自分に語り掛けるように呟いていた。どうしてだか分ら

ないけれど、ふるさとというと、何だか遠い海を思い浮かべて。青くて、深くて、涯がなくて。

この「ふるさと」という「海」は、言うまでもなく、「呉」の眠っているはずの「マリアナ」の海のことである。妻は死の間際まで「呉」のことを思い出していたということなのである。

この妻は過去ばかりに生きていたと言えるが、その過去は「藤代」と同じように現在を縛る、最初の子供の死、さらに「清ちゃん」の死という暗いものと、「呉」との恋という明るいものと両面があった。妻はむしろ思い出の中生きていたのである。そこでは時間が止まっているのであり、現在においては死んでいるのとあまり変わらないのである。時間から切り離されているとも言えるだろう。

次に二人の娘であるが、姉の「美佐子」にしても、妹の「香代子」にしても、ともに自分は両親(あるいは父親の)の子供ではないと思っていた。あたかも父である「藤代」の養子であるというコンプレックスが子供に遺伝したかのようである。

まず「美佐子」について、第二章の「煤煙」(「文学界」昭和三十八年八月)を中心に見ていこう。「美佐子」は戦争から帰ってきた父にあったときの印象が彼女を両親の子供ではないと思わせる原因となった。彼女もまた過去にとらわれていた。

お父さん、ほんとうのお父さん、と彼女はその後叫び、泣き出したきりどうしても泣きやまなかった。それまで、父親はただの写真にすぎなかった。無言のまま微笑している一枚の写真というにすぎなかった。そして泣きやんだ時に、父親

は、これが香代子か、可愛い子だ、いい子だ、と言って妹を抱き上げてあやしていた。何かしら裏切られたような感じ、それが彼女の中に尾を引いて残った。母親は眼を輝かしていた。妹はきゃっきゃつと笑っていた。そして彼女だけが尚も眼に涙をいっぱい溜めて、この人たちを眺めていたのだ。

この時の他の家族に対する疎外感が、彼女を実の子供ではないと思わせるきっかけとなっていた。さらに、彼女を疑わせるものに「子守唄」があった。一つは「蝙蝠こっこ えんしょうこ」というものであり、もう一つは「赤いまんまに 魚かけて」というものであった。母親はその両方について知らなかった。それがさらに彼女の疑いを深くする。

そこで「美佐子」はこの「子守唄」の秘密を明らかにすべくかつてのねえやの「初ちゃん」を訪ねていく。そして「初ちゃん」は「蝙蝠こっこ」の唄について「お嬢さんによく歌ってあげたものだ」と言う。つまり、この子守唄は母ではなくこのねえやから聴かされたものであったことが解る。「美佐子」は密かにこのねえやが実の母親ではなかったかと考えていたが、このねえやも「赤いまんま」の方の子守唄は知らなかった。他に誰かこの唄を彼女に聴かせた者がいることになる。それが本当の親ということになると彼女は考えるが、実はそれは彼女の父親つまり「藤代」自身であったことが、第七章の最後に明らかにされる。このように「美佐子」もまた過去にとらわれていたのであり、特にそれが「子守唄」という言葉であったことにも注目しておきたい。また、そのような呪縛を解くにはねえやを訪ね

るといふような行動が必要なことも示唆されていたのである。この点については、既に高山鉄男氏が「永遠に不在なもの」の中で同様の指摘をしている。

しかし場所こそ異なっても、二人は同じ目的をもっていたはずだ。おそらくは根元的なるものに触れることによって、彼ら父娘はともに生への復活を祈願したのである。過去の呪縛から逃れ、新しい生にむかつて歩もうとしたのである。

この「美佐子」の旅行と、第七章で「藤代」がふるさとを探す旅行は、高山氏の指摘するとおり、同じ様な目的を持つものである。ただ、ここでは行動すること、それ自体に注目しておきたい。なお、「藤代」の旅行については後に詳しく論じることになるだろう。

「香代子」については、まず第三章「舞台」（「婦人之友」昭和三十八年九月）で母が「呉さん」と譚言でしきりに呼んでいるのを聴いてしまうことから始まる。さらに、「あたしも好きよ、呉さん」と言うのも聴いてしまい、「この呉さんという人は、ママの恋人だったのに違いない。」と思う。やはり母の言葉は子供にとって呪縛となる。その上で「戦没者学生の手紙を集めた一冊の本」から「呉伸之」の名前を見つける。そこには「万一の時には、藤代の奥さんにも宜しく伝えて下さい。」という文面があった。これらのことから「香代子」は「ひよつとして、あなたが、あたしの本当のパパでないとしても、でもあたしは、あなたを愛した藤代ゆきの娘です。」と思うまでになる。

第七章になって、「香代子」はこのことを父に話すことになる。

まず、「あたしはママの子よ、パパの子じゃないわ。」と言った後、さらに父親に問い詰められて、「あたしはパパの子じゃなくて、ママと呉さんという人の子かもしれないのよ。」と言い、母親と「呉」との関係について父に話してしまふ。

それで、証拠は、と私は聞いた。どんな証拠があるんだね。証拠なんかないの、でもあたしの生まれた時から逆に考えてみたらそうかもしれないでしょう、と香代子は言った。それにママはずっとその人のことを思い続けていたようよ。きっと好きだったのよ、その人が。それでお前は、ただそれだけのことで、私がお前のパパじゃないと思つたのかい。そうよ、だってパパはあたしのことについても冷淡じゃないの。お姉さんの半分もあたしのことを好きじゃないようなんだもの。

結局「藤代」の「そのおでこのところとか、顎のしゃくくれているところなんか、私にそっくりじゃないか。」という言葉に「香代子」は納得して、父親との関係が修復されることになる。言葉から膨らんだイメージが、具体的な顔のイメージによつて払拭されたのである。けれども、根底にあったのは父親が「冷淡」であつたという思いであつた。

「美佐子」は「香代子」たちに疎外感を感じ、「香代子」は逆に姉に嫉妬している。しかし、どちらも結局、父親に対する疎外感が、自分たちは「貰い子」であるという物語を作り上げることになつたのである。謂ばそのようにして父との関係を彼女たちなりに納得しようとしていたと考えられる。これは言うまでもなく一方で父親を求めようとする意識が、父親によつて

はぐらかされたために起こることで、父親を単に嫌っているということではない。また、ここで過去は物語として作り上げられている。しかし、過去とはそもそも物語、過去物語なのかもしれないのである。

VI

次に、第七章にはいる前に、「藤代」の現在について見ておこう。

「藤代」は最初の過去に出会う前の日、台風の大雨の中で会社帰りに、びしょ濡れの若い女性に出会う。彼女は苦しそうにしていた。

そういう時彼はいつも逃げたのだ。何が彼を逃げさせたのか。本能的な恐怖なのか、打算的な利己主義なのか、意志のない行為なのか。彼は見る見るうちに顔色を蒼くし、息苦しく呼吸し、いな呼吸することさえ不可能になり、眼の前にある深淵を両手をふるつて押しやり、わけの分からぬことを心の中で咳きながら、そして、逃げたのだ。そこにどんなものともらしい理由があるうとも、彼が逃げたことに間違いはない。まるであとでそのために苦しみ、後悔し地団駄を踏み、自分を卑怯者だと嘲ることが一種の快感でもあるかのよう

に。

これまでの「藤代」の過去を見れば、それはまさに何もものからか逃げてきた過去である。思想運動から療養所に逃げ、看護婦からも逃げたようなものであり、家庭からも逃げている。

しかし、そのような思いが「藤代」をして、この女性を助けようとしたのである。まずは彼女のアパートまで送って行き、結局は病院に入院させることになる。このような親切の本当の理由は、「女の顔がやはり昔の彼女にいくらか似て」いたからであり、そのために「鈍痛のようなもの再び私の胸を塞いだ。」からであった。しかも、この女性は東北出身であり、身ごもっていたのであり、その点でも看護婦に似ていたのである。ただ、この女性は流産してしまうのだが。

ここで注目したいのは、「藤代」が逃げずに行動したことにある。先にも触れたようにこの点に「藤代」が過去の呪縛から逃れる途が示唆されているのである。これまでの「藤代」の生き方は、まさに受動的な生き方と言えるのではないか。看護婦との関係においても、積極的に小屋を借りたりしたのは看護婦であった。結婚もまた親の言いなりであった。戦争もまた彼個人の問題ではないが受動的なものである。「藤代」が何らかの形で変わるとすれば、それはこの受動のくびきを離れて、能動に向かうときであろうことが想定されるのである。

また、この女性とかつての看護婦とは状況が似ていたが、この女性は自ら好きになった俳優を追っかけて東京まで出てきている。かつて看護婦が東京行きの列車の出るホームの反対側から故郷に帰ってしまったのとは正反対に。そこには戦前と戦後という時代の違いが反映されていると考えられる。

また、「藤代」はこの女性の部屋を「アト・ホーム」の様にくつろげる場所だと感じていた。このことが後にこの女の去っ

た部屋を借りて、このような文をこの部屋で書くことになるのである。そして、この女性にそれまで人から言われなかったようなことを言われる。

わたしは本当を言うと、笑っちゃ厭よ、小父さんが可哀そうなのよ。小父さんはきつと何か苦しいことや厭なことがあって、それを我慢して、自分のやさしさを無理に殺しているようなところがあるんだわ。

この女性の言葉はまさに「藤代」の本質をついていた。「藤代」は彼女には、自然な自分を曝しているのである。それは前述のように、ここが日常からはずれた場所であるからだろう。

この「可哀そう」という言葉は、以前戦友からも言われたことがあった。

可哀そうに、そう戦友が呟いた。

その一言が彼の意識をふと現実に戻した。可哀そうにと、それは娘を指して言われたのだろうか。それとも彼を指して言われたのだろうか。眼が暗闇に馴れると、彼は戦友の落ち窪んだ眼に涙が浮かんでいるのを認めた。それは外界の光明をかすかに反射してきらりと光った。それなのに彼の眼は乾いていた。彼の流すべき涙の泉は既に涸れて、この昔話が一律の涙を彼に甦らせることもなかった。そして彼は驚いたように、この友達の眼に浮かんだ尊い雫を見詰めていたのだ。かつての看護婦とのことを戦友に話した時、戦友に「可哀そうに」と言われた。それは看護婦だけではなく、「藤代」自身にも言えることなのかもしれないのである。そして、ここで戦

友が涙を流していることは、この「可哀そう」が、この作品に一つのカタルシスをもたらすであろうことを暗示しているのではない。まだ、「藤代」は涙を流すことは出来ないが。

VII

第七章において、「藤代」の妻は既に死んでいる。けれども、その死の間に「藤代」と「ふるさと」の話をする。そのことが「藤代」に「ふるさと」ということを考えさせる。

そして妻のことを思い出すたびに、私はふるさとということとを考えた。(中略) ふるさととは自分が生まれ育った場所をのみ言うのではあるまい。人はいつも、どこかに、彼にのみ固有のふるさとがあるように感じ、その彼方に憧れる心を持ってに違いない。

ここで「藤代」は自分の生まれ故郷をふるさととはしていない。それは養子に出された彼には、そのようなふるさとはないからである。そのため、もう一度、あの看護婦の故郷「佐比」を訪ねることにするのである。この「ふるさと」を訪ねようとするのは、先にも触れたように「美佐子」が子守唄への疑問を解くべくねえやを訪ねることと重なっている。

「藤代」はまずそこで、船から彼女が飛び込んだ断崖を見た。それはまさにそこだった。三十年前に、ひそかに私の子を身籠もったのを恥じて、彼女が身を投げて死んだのは。(中略) あの頂にあつて、今この世から別れて行くと決心した時に、彼女の意識のなかにどのような面影が浮かんだらうか。

あのやさしい娘は最後に何と叫んだのだろうか。私はそれを知らない。私はそれを永遠に知ることはない。(中略) しかし彼女は死ぬことによって彼女の愛を証明した。

看護婦の「あなたが行ったらわたしは死ぬわ」という言葉、それは彼女の愛の証であった。それに対して「藤代」は彼女を裏切り、かつて三十年前にこの断崖を訪れた時も「身をすさつて逃れ去った」のである。彼は彼女との愛のためにここで死ぬことは出来なかつたのである。やはりここでも逃げていたのである。かつて「藤代」がここを訪れた時、彼女の母親から「娘は身籠ったのを恥じて淵から身を投げて死んだ」と聞かされた。これまで彼女の死はこの言葉によってしか捉えられていなかったといえるだろう。この言葉に「藤代」は縛られていたのである。前述のようにこの言葉の前に、楽しかった過去はつらい過去へと変わっていった。けれども、娘は本当は何を考えていたのだろうか。娘の最後の言葉は何であったのか。「藤代」は初めてその娘の自殺そのものと面と向かつたのではないかと考えられるのである。母親の言葉を抜きにして、具体的な行為としての自殺を初めて受け止めたのではないか。過去は今、現在として「藤代」の前にある。

その後、「賽の河原」を訪れる。「そこは三十年前と何一つ変わっていなかつた。」という、過去が過去のまま残っているような場所であつた。さらに「藤代」はその近くの「無縁墓地」にひかれるのであつた。

そして、まさにそこに、私が三十年前には見なかつたもの

を、そして私が今、見なければならぬものを、見たのである。それは海沿いにあるひと困いの無縁墓地だった。

それは裏山の中腹にあった部落の墓地に較べても、あまりに見すばらしい石の群落にすぎなかった。(中略) 名も知られずに死んだ人、恥辱の中に死んだ人を埋めるところである。そして私の恋人が眠っているところも、まさにこの無縁墓地のほかにはなかった。

(中略)

私は雨に濡れながらそこに立っていた。賽の河原として知られる前は、あの洞窟もまた、こうした無縁墓地ではなかっただろうか。私は考えた。貧しい村の母親たちが、こっそりと間引きしたみどり児を埋めに行った場所がそこではなかっただろうか。(中略) この河原は人間的な罪の感じに暗く染められていた。生まれた子に死んでもらわなければ、とうてい他の子どもたちを育てることが出来ないほど、不毛の土地に生を享けた母親たちの、悲しい罪のしるしをそれは持っていた。自分もまた救われないことを承知した上で、母親たちはその罪をおかした。

この「無縁墓地」で「藤代」は看護婦の死を实体として認識したと言えるのではないか。かつて彼がここを訪れたとき看護婦は既に自殺していたのである。「藤代」は看護婦の遺体を見ているわけではない。先にも述べたようにその死はあくまでも「身籠ったのを恥じて淵から身を投げて死んだ」という母親の言葉でしかなかった。先の断崖に続き、今死そのものをとらえ

たのではないか。

また、これまで「藤代」自身「間引きそこないの子」と思ってきた。今初めて被害者としての視点からではなく、親としての視点を持つようになったと言えるだろう。無論、それは娘二人との関係が回復されつつあることの反映でもあるだろう。そして、そこで母親のことを思う。

私は雨に濡れながら、その時初めて私の母親のことを想った。雪深い東北の村、えなの流れ来る河、暗い顔をして泣いていたであろう母親、私はこういう遠い記憶を喚び覚ました。そして母親となる前に、私への愛を抱いてお腹の子と共に死んだ彼女のことを想った。それは罪深い行為だったと人は言うだろう。しかし誰が、彼女を責めることが出来るのか。誰が、私の母親を責めることが出来るのか。私たちはみな生きることによって、穢れた魂と罪の意識とを持ちながら、しかも生き続けいくのではないだろうか。そのためにこそ賽の河原というものがあられ、旅人は死んだみどり児の代りに、一つ一つ小石を積み重ねて自分が生きていることの証とするのではないだろうか。

いささか引用が続いてしまったが、これらの引用を読めば既に「藤代」が過去の呪縛からどのように解放されていくのかということが解るだろう。特にここで初めて意識的に過去の「記憶を喚び覚ました」ことに注意したい。これまであんなにまで意志的に忘れよう、忘れようとしていた過去の記憶を今逆に意識的に思い出しているのである。否定されるべき過去から、む

しろ肯定すべき過去へと変容して行く。さらに、自らの「生きることへの誠意」を奪ってしまった「母親」に対して、初めて救す気になったのである。それは「私たちはみな」とあるように、このような過去が「藤代」個人にのみあるものではないという認識にもよる。そこには戦前の日本という時代背景、さらに戦争という悲劇なども含まれているだろう。しかし、それよりもここに「暗い顔をして泣いていただろう」と、母親が具体的なイメージで語られていることに注意したい。「いつそ河に流して」という言葉によって、言葉を通して見られた母親ではなく、具体的な子供を捨てるという行為をするものとして捉えられているのではないか。それによって母親の心情にまで思いが至ることになるのではないか。そして母親を救せるようになったのではないか。このようにして、「藤代」は「いつそ河に流して」という言葉の呪縛から解放されていくのである。

この後「藤代」は漁船で旅館に戻るのだが、海は大荒れであった。私は幾度か、船が今にも沈むのではないかと懼れ、しかし今この海で死んであの無縁墓地に葬られるのならば、それもまた私の一生にふさわしいものだと考えていた。彼女の死んだ魂がしきりに私を呼んでいる声が聞こえたような気がした。その下ぶくれの寂しげな顔が眼に浮かんだ。彼女は言っていた。わたしは嬉しいわ、あなたがまだわたしのことを忘れないでいてくれるということ。みんな不幸なのね。みんな可哀 想なのね。でもあなたはわたしのことを決して忘れな

いわね。

僕は決して忘れないよ。と彼は言った。
僕は決して忘れないよ。と私は言った。

すでに母を赦した「藤代」はここで看護婦からゆるしをえる。彼の罪は彼女以外からは赦されるものではなかった。けれどもすでに彼女は死んでおりそれは赦されるあてのない罪、文字通り赦されざる罪であった。けれども、今彼女は「わたしは嬉しいわ、あなたがまだわたしのことを忘れないでいてくれる」と、「藤代」を赦したのである。無論それは彼の幻聴であるかもしれないが、ちょうど彼にとっての過去が、もしかすると幻であっても現在の彼を縛っていたように、この彼女の言葉は彼を過去の呪縛から解放する。生きているからこそ忘れない。忘れないからこそ忘れない。過去を忘れようとすることは、過去を忘れないでいることでもあったと言えるだろう。さらにあえて言えば、彼女の死の間際の言葉は、「忘れないわね」というものであったかもしれない。また、「この海で死んで」と思うことは、看護婦の死による愛の証明に対する、三十年前に出来なかつた答ということになるのではないか。そして、ここで初めて「彼」と「私」が同じ存在となる。過去と現在とが繋がったのである。また、ここで「忘れない」と彼女に言うことは、最初の過去の場面で彼が思っていた「お前は忘れていいのか」という、過去からの問に対する答でもあったのだ。さらに既にそこで過去の人たちは「私たちはお前を見ているよ」と言っていたのであり、それを「藤代」が自らを責めるような言葉として理

解していたのであった。今「藤代」はまさに看護婦が自分を見ていることを感じているのであり、過去の人たち、母親や戦友もまた彼を見ていることを理解したのではないのか。「藤代」は過去を回復したのであり、それはまた現在を回復したこともある。

この後「藤代」は肺炎になりかけ、旅館で「美佐子」の看病を受けることになる。そこで「美佐子」が「赤いまんま」の子守唄を歌っているのを聴き、それが実は自分が「美佐子」の小さいときに歌ってやったものであることを告げる。また、その唄によって、「藤代」は、

それを口にしてしている間に、私はあの河のほとりの道を、手拭いをかぶった母の背中に負われてあやされていたに違いない幼い自分というものを思い出していた。

のであり、その唄は「私を文字通り私のふるさとへと運んでいった」のであった。「えなの流れる河」という言葉ではなく具体的な想い出としての河を思い出しているのであり、これによって彼の過去の根底にありながら、喪失されていたふるさとが最後に回復されたのである。というよりも、発見されたと言ふべきかもしれない。

VIII

第一章では「藤代」は過去を意志的に忘れようとしていた。けれども、過去はその意志に関わらず彼の前に現れる。過去は流れずに彼の中で澱んでいく。

しかし私にとって、忘却の河とはこの堀割のように流れないもの、澱んだもの、腐って行くもの、あらゆるがらくたを浮かべているものの方が、よりふさわしいような気がする。この水は、水そのものが死んでいるのだ。そして忘却とはそれ自体少しづつ死んで行くことではないだろうか。あらゆる過去のがらくたをその上に浮かべ、やがてそれらが風に吹かれ雨に打たれ、それら自身の重味に耐えかねて沈んで行くことではないだろうか。

無論、日常的な時間は流れていく。けれども過去はその日常的時間に押し流されては行かない。そして、「藤代」はこの水のように死んでいるのである。それは当然最愛の女性を死なせ、愛情をなくしているからであるが、これまで述べてきたように、時間から切り離されているためだとも考えられるし、日常的な時間の中に自己を喪失しているとも解釈されるのである。「藤代」は過去を忘れようとするあまり、過去と現在との間に時間が流れずに、自己を見失い、空虚な日常、現在を生きていたのであった。

ではその過去とは、どのようなものであったのか。「藤代」において、過去は具体的な行動をともなったものとしてより、ある言葉、罪に結びつくような言葉に代表されるものであった。母親はその具体的な顔などよりも、「いっそ河に流して」という言葉として記憶される。看護婦との楽しかった思い出も、「身籠もったのを恥じて淵から身を投げて死んだ」という言葉や、「あなたが行ったらわたし死ぬわ」という言葉として残るので

ある。そして、それは現在の「藤代」を呪縛し、彼をして既に「死んでいる」と自らを認識するようにしているのであり、家族関係を壊しているのである。それは言葉の呪縛とさえ言えるだろう。そして、妻や二人の娘もまた、それぞれの過去に縛られていた。それも「子守唄」や「母の謔言」という言葉にまつわるものであった。

この言葉の呪縛から逃れるためには、具体的な行動（能動的行為）が求められる。そのきっかけは台風の夜に一人の女性を助けることになった。そして、「美佐子」の旅行を踏まえて、第七章におけるふるさとを探す旅行へとつながっていくのである。そのふるさとと呼ぶべき場所は、自らの生まれた場所ではなくあの看護婦の生まれ、そして死んだ場所であった。そこは三十年前に彼が訪ねてきた時とまるで変わっていないかった。まさに過去そのものがそこにあったと言うべきであろう。時間は流れて行き逆行することはない、けれども、そのような時間の流れから逸脱したような場所がある。「賽の河原」とは、ずっと昔から変わらない場所であり、時間の大きいなる澱みなのではないか。「藤代」はそのような場所で、それまで忘れようとしていた過去そのものと向き合うことになったのである。その場所では言葉ではなく、具体的な母親に出会い、母をゆるし、具体的な看護婦の死の場面に会い、看護婦にゆるされる。それによって「藤代」は過去を回復し、ふるさとをも回復というより、発見する。「藤代」の中で、過去から現在へと時間が流れ始めたと言っても良い。

さらに、看護婦に「忘れないよ」と言うことは、過去を現在にするということであった。大森莊蔵氏は「記憶について」の中で次のように述べている。

しかし、では死んで久しい亡友を思い出すときもその人をじかに思い出しているのか、と問われよう。私はその通りであると思う。生前の友人のそのありし日のままをじかに思い出しているのである。その友人は今生きては存在していない。しかし生前の友人は今なおじかに私の思い出にあらわれるのである。（中略）そのとき、彼の影のような「写し」とか「痕跡」とかがあらわれるのではなく、生前の彼がそのままじかにあらわれるのである。「彼の思い出」がかるうじて今残されているのではなく、「思い出」の中に今彼自身が居るのである。ある意味では、過去は過ぎ去りはしないのである。

我々が思い出しているとき、それは過去の「痕跡」を思い浮かべているのではなく、思い出されている対象は今「居る」というのである。思い出すことによって、過去は現在となる。忘れないことによって、過去の人たちは生き続けるのである。この作品の構成が、過去と現在の時間が交錯するようになってるのは、まさにこのように現在の中に過去が織り込まれていることを表象していたのである。

「藤代」における過去の呪縛とは、彼の罪の意識による言葉の呪縛でもあった。しかし、そのような呪縛をもたらす根底は、現在へと流れる時間そのものを否定しないことにあったのでは

なかつたか。一見矛盾するようだが、過去を過去と認定するのは、過去から現在へと流れる時間の流れそのものを容認しているからである。それは忘れようとするのが、忘れていないことの証のように、過去を否定することは、過去を成立させている時間を肯定することなのである。そして、時間の流れが不可逆であるなら、過去は取り消すことが出来ないのである。時間の流れを認めるとき過去は過去として成立する、それが「藤代」を呪縛することになる。過去から現在への時間の流れそのものを超えられない限り、過去からは本質的には自由になれないのである。そのためには「賽の河原」のように時間から逸脱した場所が必要であったのだ。そこにおいて言葉ではなく具体的な過去そのものに出会い、言葉の呪縛から解放された。さらにこの過去そのものと出会うこととは、時間というくびきを超えたということである。過去から現在へと流れる絶対的とも言える時間、人間にとって生から死へと流れる時間、その時間の流れを超えることが出来るということをも示唆していたのである。そして、それこそが過去の呪縛から解放されるのに必要だったのである。またそれによって現在の中に過去が織り込まれるのである。さらにそれは日常的な時間を超えたということでもある。「藤代」は日常的な時間に埋没していた自己を、発見できたのではないだろうか。先に引用した高橋氏が言う「『時間』が流れる」というのは、日常的な時間の中で見失っていた自己を、再び見出したということではないだろうか。「藤代」が発見した何かとは、過去であり、ふるさとであるが、またそれは

結果として、彼自身であったと言えるのではないか。

最後に、途中で触れた「可哀そう」について述べておきたい。看護婦が「藤代」に「みんな可哀想なのね」と呼びかける。この作品の登場人物たち、「藤代」を養子に出した母親、自殺した看護婦、戦場で死んだ戦友、その妻、「藤代」の妻、死んでしまった子供たち、そして「藤代」自身、まさにみんな「可哀想」と言うことが出来るだろう。過去はみな「可哀想」なのである。けれども過去の呪縛から「藤代」を解き放つもの（呪文）、それがこの「可哀想」なのではないか。「可哀想」とは唯一過去を認める可能性を秘めた言葉だったのである。それ故にこの言葉によつてのみ、「藤代」は罪を赦されるのではないか。つまり、「藤代」が自らも「可哀想」と認めた時、「藤代」に初めてカタルシスがもたらされるのであろう。ただ「藤代」は戦友のように涙を流していない。あの子濡れの雨がその代わりだとするのには、あまりに抒情的な読みに過ぎるだろうか。ただ、既に「戦友」について「天を向いた二つの眼球に、雨が落ち、雨がたまり、落ち窪んだ眼窩は涙をたたえ、その涙は天の蒼さを映していた。」という印象深い描写があった。あながち雨を涙と見るのは勝手な読みとは言えないだろう。少なくとも、カタルシスはこの作品の読者にももたらされるものであり、雨を涙と見るのは我々（読者）の特権なのである。「藤代」が救われる時、読者もまた救われるのである。

注

- (1) ヴラジミール・ジャンケルヴィッチ『還らぬ時と郷愁』
(仲澤紀雄訳・国文社刊)
- (2) 朝日新聞・昭和三十九年七月六日付
- (3) 難波信雄氏は「日本近代史における『東北』の成立」(『歴史の中の東北』—東北学院大学史学科編・河出書房新社刊—所収)の中で、「東北」という観念について次のように述べている。

要約していえば、「東北」は維新政府がいう皇化の遅れた後進地とする観念を背負って誕生した。それは、「蝦夷」の伝統的イメージと開化・殖産のフロンティアとする二重の構造をもっていた。自由民権期には東北の内部から、その地域的な独自性を踏まえて自主と自立を主張し、西南日本と比肩しようとする内からの「東北」が対抗的に生みだされていく。しかし、大日本帝国の政策転換と日本資本主義の成長につれ、それは阻害され、ついには東北の後進性を自認する観念へと変化したのである。

また、岩本由輝氏は「東北開発を考える—内からの開発・外からの開発—」(同書・所収)の中で、昭和恐慌の影響が東北地方において特にきびしく、「売るべき土地をもたない小作人などの零細農のなかには娘の身売りに陥るものが続出した」と述べている。

- (4) 倉西聡「福永武彦『忘却の河』論」(『文芸と批評』昭和五十九年十二月)

- (5) 宮島公夫「『忘却の河』論—家庭問題を視座として—」(『イミタチオ』昭和六十一年四月)
- (6) 高橋源一郎「時と文学・見出された時」(『時の本』—光琳社刊—所収)。

- (7) 福永武彦・菅野昭正対談「小説の発想と定着」(『国文学』昭和四十七年十一月)

- (8) 高山鉄男「永遠に不在なるもの」(『解釈と鑑賞』昭和五十二年七月)

- (9) 大森荘蔵氏は『時間と自我』(青土社刊)の中で、「経験が制作される」として、次のように述べている。

経験が制作される、というのはいかにも奇妙に響くだろう。確かに、知覚や行動の経験が制作されるなどということはナセンスである。しかし、過去形の経験は想起されることがなければ全くの「無」なのである。その無は忘却の空白として誰にも親しいものである。その空白から想い出そうとさまざまな言葉を探し、選び、試みる。ああではなかった、こうでもなかった、と何度かしくじった後で遂に一つの文章や物語が想い出される。こうして過去形の言葉が作り上げられること、それが過去形の経験が制作されることなのであり、「過去を想い出す」といわれることなのである。

過去の経験とは、過去の出来事そのままではなく、無意識の裡であろうと、言語によって表現されたもののだと言っているのである。とすると、最初から言葉であったものは行動を言語化したものに対して優先する可能性はあるのだろうか。前者は一次

的であり、後者は二次的である。ここに記憶においての差が生じる可能性はあるのだろうか。無論、言葉にしても何らかの選択がなされており、言葉そのままかどうか厳密に言えば疑わしくはない。とはいえ、このことは本稿では明らかにすること出来ず、専門の方の意見をうかがいたいところである。ただ、この作品では意識的に言葉の方が選択されている、優先されていると考えられる。また、「藤代」については、過去は記憶という彼の内面的なものではなく、彼の意志とは別に外側に現れるものであって、このような記憶と同様に考えて良いか疑問がある。それも彼の記憶と無縁とは言いきれないことではあるが。また、ジョン・コートルは『記憶は嘘をつく』（石山鈴子訳・講談社刊）で、記憶の中にすべてが残っているという考え方を否定している。

記憶のなかに何か潜んでいるという体験は、いとも簡単に、記憶のなかにはあらゆるものが隠されているという信念にすり替わってしまう。そうした信念とともにいくつかの結論が当然のごとく引き出される。記録は元のままの状態で存在している、だから、見つけ出したときにはオリジナルとして認識できるはずである、と。

と述べた上で、記憶は変容するものだとし、次のように述べている。

しかし、昼は記録保管人という顔をもつ記憶は、夜になると密かな情熱を燃やしている。自分自身についての話をせつせつとこしらえているのだ。そうした話を個人的神話と呼ぶ

人もいる。私たちが神話という場合、それは嘘偽りという意味ではなく、総合的にとらえた現実、司書が知っているものとは異なるたぐいの現実を指している。神話とは、理性だけではなく情にも訴えかけて、真実と思うものに説得力をもたせようとする物語である。神話というものは文化や人間の集団に属するものだと考えているが、個人的な神話というものもある。神話が個人的なものの場合には、真実を知ろうとし、自己、つまり、自分とはいったい何かということについて説得力をもたせようとするわけである。

記憶には「司書」のようにきちんと残そうとする側面と、神話、物語を作る側面の二つの機能があるというのである。

(10) 大森莊蔵『流れとよどみ―哲学断章―』（産業図書株式会社刊）所収。